

「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」
領域開拓プログラム進捗評価結果表

課題	A : 「認知科学的転回」とアイデンティティの変容
研究テーマ名	予測的符号化の原理による心性の創発と共有-認知科学・人文学・情報学の統合的研究-
研究代表者	大平 英樹
所属機関・部局・職	名古屋大学・大学院情報学研究科・教授
研究成果の総合評点 : A	
研究成果に係る所見	
<p>当初の計画どおり意欲的に、実験や解析などの実践を多方面から展開し、成果発表も精力的におこなわれている。人文学の研究者がテキストマイニングのような定量的分析技法を学んで導入する試みが、新たな人文学を提唱する上で極めて有望なことを示している。審査に係わる意見への対応はなされていたが、構成的アプローチ、文献研究、テキストマイニングそれぞれの間の関係は分かりにくい。心理実験と文献研究やテキストマイニングとのギャップがかなり大きい。実験手法自体の妥当性を専門的な見地から評価することも必要である。文学作品のテキストマイニングについては、従来の伝統的手法での読解を検証するにとどまり、そのデータ解析が、作品創造をめぐる新しい解明に結びついているとまでは言えない。現在よりも大量のテキストから、全体の傾向や例外を見つけられると素晴らしい。</p>	
研究期間の延長に係る所見	
<p>これまでの研究成果を踏まえ、申請書の中でいうところの「ハイブリッド人文学研究」のさらなる展開を期待する。プロジェクト各グループの連携については、「畏怖」を対象として研究し、畏怖の喚起を生体信号を用いて測定する計画になっている。テキストマイニングも畏怖の主観的経験に関する発話をデータとして収集する。その意味では連携は十分だが、実際の連携にはさらに工夫が必要と考えられる。ハイブリッド人文学研究で、デジタル公開されていない重要文献の海外での収集を行うことになっている。それ自体は重要なことだが、プロジェクト全体の中での位置づけは不明である。デジタル化には大きな労力が必要である。本プロジェクトの予算は限られ、デジタル化可能なのはごく僅かだが、それでも実効性が上がっていくのかどうか、検証しながら進めて頂きたい。</p>	

※ 「研究成果の総合評点」に対する標語は下記のとおり。

- S. 研究目的に照らして、期待以上の成果があった
- A. 研究目的に照らして、期待どおりの成果があった
- B. 研究目的に照らして、期待どおりではないが一定の成果があった
- C. 研究目的に照らして、十分な成果があったとは言い難い